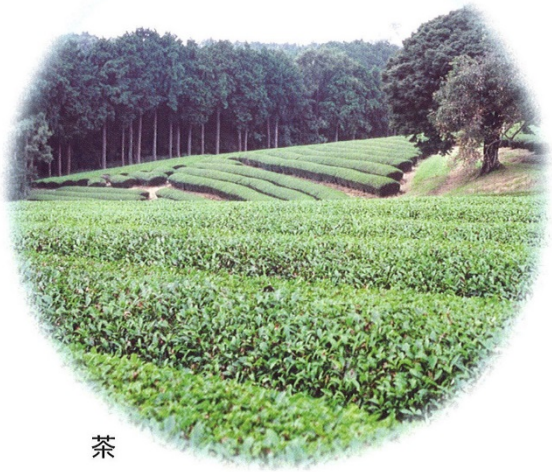
裾野市立富士山資料館特別展資料集

富士山の恵みと人々の生活

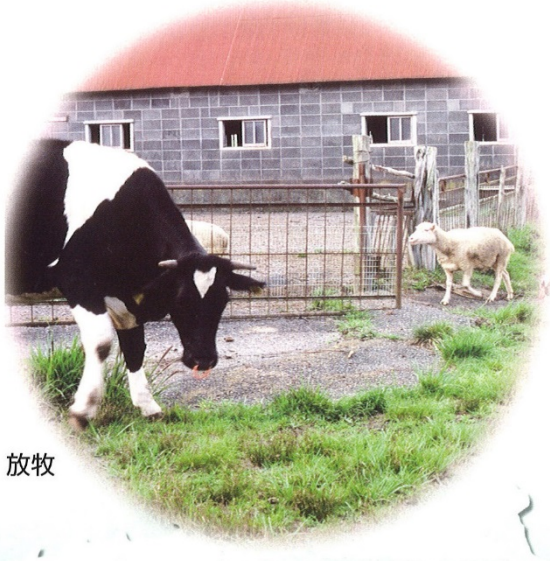
― 自然と近代産業 ―



茶

わさび

水かけ菜



放牧

平成18年度

裾野市教育委員会／裾野市立富士山資料館

もくじ

はじめに

富士山に関する記録

Ⅰ．富士山麓の自然を使った産業 ……1

1．林産物 ……1

(1) スギ ……1

(2) ヒノキ ……1

2．炭 ……2

(1) 炭の種類 ……2

(2) 竹炭 ……3

(3) 須山の炭焼き（製炭）の技術 ……5

①炭窯

②製炭の順序

3．竹 ……7

(1) 竹行李のはじまり ……7

①ススダケ（スズ竹）

②竹の切り出し

(2) 竹行李作りの工程 ……8

(3) 女と竹行李作り ……9

(4) スズ竹の特徴・用途 ……10

4．富士南麓におけるお茶 ……12

(1) 人類とお茶の歴史概略 ……12

(2) 日本のお茶の歴史……12

(3) 静岡県の茶の栽培の始まり……12

(4) 静岡県奨励品種の主なチャの品種 ……13

(5) 裾野市のお茶栽培 ……14

①須山地区のお茶栽培

②富士市のお茶栽培

③「不二農園」裾野市に現存する大規模茶園

5．裾野市の芝生生産 ……20

Ⅱ．富士山麓の水資源を使った産業 ……22

1．湧水の起源 ……22

2．湧水の分布と湧水量 ……22

3．地下水の流れ ……23

4．富士山の湧水の恵み ……24

(1) 御殿場・小山地方の「水かけ菜」の生産 ……24

①水かけ菜栽培の歴史

②うね作り

③水かけ菜の栽培

ア．特性

イ．品種

ウ．畑の準備

エ．種

オ．水掛け

カ．追肥

④特産「水かけ菜」あれこれ

ア．水かけ菜とは

イ．生産地の分布

ウ．後継者不足

エ．収穫のしかた

オ．栽培面積など

カ．湧水地と栽培地の距離

キ．水菜漬の作り方

ク．根こぶ病とは

ケ．栽培にかかる労働時間

⑤湧水に育つ「水かけ菜」

⑥阿多野の水かけ菜

ア．阿多野用水物語

イ．水かけ菜「阿多野ブランド」の誕生

⑦水かけ菜づくり風景

(2) 富士山麓の「わさび」生産 ……32

①瀬戸さんが総理大臣杯に輝く

②瀬戸家のわさび栽培

③「わさび」とそのふやし方

④栽培の歴史

⑤天城のわさび発展の父

⑥富士山麓わさび栽培の先駆者

⑦富士山登山口にわさび田を拓く

⑧わさびの生産と流通

⑨富士山麓のわさび生産

⑩わさびの種類

⑪わさびの栽培条件

⑫わさび田の様式

⑬「御殿場わさびの郷」の役割

⑭山麓わさびあれこれ

(3) 富士山西麓の養鱒業 ……38

①富士養鱒場のあけぼの

②ニジマスとは

③ニジマス飼育あれこれ

④民間養鱒場の発展

⑤富士宮の養鱒業

⑥富士養鱒漁業協同組合の概要

⑦ニジマス料理普及に向けて

⑧富士養鱒場の役割

Ⅲ．富士山麓の土地を使った産業 ……42

1．牧場 ……42

(1) 裾野市における牧場経営 ……42

①「忠ちゃん牧場」杉山忠作氏

(2) 富士宮市朝霧高原における牧場経営 ……46

①富士朝霧高原の開拓の歴史と酪農の歩み

ア．開拓の歴史

イ．種穀農業から酪農へ

ウ．「有機の里つくり」

エ．「有機の里づくり運動」

オ．富士ミルクランド

②放牧農家

ア．富士宮市　放牧牛乳「なかとみ牧場」中島邦造氏

イ．富士宮市　酪農体験「松下牧場」松下克己氏

(3) 富士山麓の牧畜と静岡県種蓄場 ……52

Ⅳ．特別展をふりかえって ……53

Ⅴ．「富士山の恵みと人々の生活」出品目録 …54

あとがき ……56

① 須山地区のお茶栽培

財団法人須山振興会発行の「須山のあれこれ」の文中で、須山村の第一功労者勝田三平翁の譚で須山茶に関する事項を初代富士山資料館長渡辺徳逸が記しています。

勝田三平翁は文政６年に名主勝田家に生まれ、天保年中に若くして名主の要職についています。三平翁一代の事業のうち、明治９年還禄武士に払い下げられた官有林1,700町歩を須山村113戸の共有林として払下げに成功し、須山経済の土台を築いたことはその最も顕著な業績です。その他、各戸の茶園の創設と製茶輸出、養蚕等の産業開発に尽力し、弁当場、水ヶ塚水源の発見による飲料水の安定確保、三平横道（現富士山スカイライン）を創設し、屋根葺き材の割木の製造等須山村民の生活安定に尽くした偉大な指導者です。須山地区では共有地の碑、水源の碑、十里木土地保有の碑等が建立され、その功績を伝えています。

須山茶は、三平翁が行った事業の一つである茶園の創設によって須山茶の製造が始まりました。須山茶は、三平翁が初代郡長の江原素六と親交があり、素六の指導で須山茶をはじめました。その過程を見ると、明治３年茶の実を買い入れる。明治４年春一戸に付き400粒茶の実を播く。明治５年一戸に付き２～５反歩ずつ分割する。製茶工場は13ヶ所、平均茶師は一ヶ所に10人、茶摘み女30人、一番茶、二番茶の２回30日間滞在、製茶は三共園を中心に、国内向けと輸出茶があり、輸出茶が多かったそうです。主にアメリカへ輸出していましたが、見本の茶と輸出した茶が違うと突き返され大変な損害をしました。損害をどうしたかというと、村人には迷惑をかけないで自分の全財産を処分してその負担をしたのです。須山ではミツマタ（三椏）栽培も盛んに行われ、黒岳の平の所を、40町歩ほど開墾して三平翁は、三井物産の重役に開墾地を貸してミツマタ（三椏）を作らせました。明治20年頃には須山や印野でも、奨励されてよく作ったそうです。明治40年頃迄は畑でよく作り畑の畔にも植えました。一軒で300貫から400貫取れ、一貫が２円で800円位のお金が、入ったので大変な収益だったそうです。

須山地区の茶畑

他の文献によると、渡辺久雄氏の記録や、北駿郷土研究会の滝口源太郎氏、宮崎彦作氏の話として、(1)明治３年三平茶の実購入。(2)明治４年春一戸につき400粒（大野原）茶の実を播く。(3)明治５年須山村一戸に付上２反歩ずつ分割。とあります。宮崎彦作氏の話として、(1)明治９年頃から戸長勝田三平は大野原を開墾させて各戸２～５反の茶畑を造らせた。(2)村内に製茶工場が13ヶ所あって平均茶師10人、茶摘み30人各々一番茶二番茶の２回30日位ずつ滞在して製茶に携わり、製茶師の一日の仕上げ量は８貫だった。(3)製茶は国内向け、輸出茶とあり輸出が多かった。(4)始め製茶は工場の所有者の事業だったが、後年は片浜辺りから富士郡方面の業者が元締めとなり工場をかりて製茶した。(5)村中の茶の葉を集めて製茶、年末に改正で整理した(注2)。その後養蚕が盛んになるに及んで衰微した。

(注2：年末に改正して整理したとは、年末に供出量に応じて各戸に対して精算した意。)

三平翁自身も渡辺隼人、杉山常蔵、と共に共同茶園「三共園」を経営し、明治10年積信社を創建して、静岡茶のアメリカ輸出の先鞭をつけた江原素六と提携、その後、経営指導に没頭した。今も大野原寄りの杉林中に茶株のあるのはその名残であり、黒岳の平地に開墾の名残があるのは、江原素六の仲介で三井物産会社に113戸の共有地の一部を貸し茶袋の原料三椏を造らせた名残で、須山村内各戸の大田(注3)のクロ(注4)にも皆三椏を栽培させました。三椏を原料にした紙袋は理想的な茶袋だったそうです。(注3：大田とは広い田圃)（注4：クロとは田圃や畑の境の畔）三平翁経営の茶の輸出は横浜の三井物産支店を通して行われたがある時見本と品物が違うと突き返された事があり、莫大な損失だったが、三平翁は自分の全財産を処分して之に充てた。この様な事件は現島田市の牧の原一帯の茶園でも起きている事が判明して

5．裾野市の芝生生産

裾野市の芝生生産についての文献資料や歴史資料はほとんど無く、芝生生産者からの聞き取り調査に頼るしかなかったのですが、その歴史を知る人達も高齢化が進み記憶が定かでなくなってしまっているのが現状でありました。薄れ行く記憶を辿りながら徐々に判明してきたのが裾野市では芝生の生産は最近のもので、農家の生計を維持するための物では無くて、第二次世界大戦前には、旧陸軍の要請で大野原（現東富士演習場）から野芝を採取して、九州鹿児島の飛行基地へ採取した野芝を送り届け、その時に芝生の張替えや芝切などを行っていたのがそもそもの始まりである事が明らかになりました。

裾野市では、土木業者のN社が戦争当時から主になって野芝の出荷や人夫を九州などに送り出していたようです。

裾野市　芝畑

戦後野芝の需要は激減しましたが、戦後復旧のための河川工事や道路の法面などの保護や公共用地等整備に芝生が使用されだし、そのため少しずつだが需要も伸び始め、さらに芝生の需要に拍車をかけたのが高度成長時代のゴルフ場建設等です。これで生産が盛んになっていき、富岡地区以北では農業生産高の第一位をも占めるようになりました。高度成長時代以前の芝生の生産は二次的な物で東富士演習場から種芝を採ってきて麦畑の畝と畝の間に採取してきた芝を植え、麦を刈り取るとその畝の土を目土のようにし、平らになったところに更に芝生を植えていたとのことでした。また、須山地区では当初４名程で本格的に畑に芝の育成を始めたのですが、周囲から「あんな草なんか作ってバカなことをやっているものだ」とよく言われたと芝生栽培の草分け的な苦労話もしてくれました。

その後、政府の減反政策に基づき米作地として造成した田圃の転換作物として芝生生産量が急速に伸び田圃は芝生畑に変わって行きました。芝生の生産が増えるにしたがって芝生も改良され野芝から名前も「富士芝」として出荷されていきました。芝生は、千葉県、鳥取県等が主な出荷先で種芝として出荷していたそうです。芝生生産の最盛期時は米一反歩あたりの収入金額の1.5倍～２倍（昭和45年～50年当時一反歩当り12万円～15万円で最盛期にはむ20万円相当の値も付いたことがあったそうです。）もの金額になったそうです。当時富岡及び須山地区の芝生耕作地は約500～700町歩程あったそうです。

芝生の生産過程を見てみますと、始めに畑を平らにし、種芝を一本一本にほぐして２㎝～３㎝ほど離して植え付けていき、概ね１反歩当り種芝の植え付けは約30坪程度の面積を占めるように目途をつけ植えていきます。後は芝のランナーの生育を観察しながら肥料の追肥や消毒及び雑草取り等の管理を丁寧に行うと３月に植えた芝生は12月には出荷できるそうです。一旦芝畑にして出荷した畑では、畑面を平らにして、残っていた芝のランナーが伸びるに任せ消毒や雑草取りを行い出荷出来る状態にするそうです。

芝生を生産して売るということは、芝の根を売ることなので根についている畑土ごと切り取りそれを出荷していたので生産者達は、芝を売ることを「土を売ると言っていました。」土を売るということは畑土の栄養分や土がなくなってしまうことになり、新たに土を入れ芝の種を植えるのですが、土に栄養がないため肥料の追肥や、また根に虫がつきやすいことと、手入れを疎かにすると直に雑草が生い茂るので、それを防ぐため、消毒を欠かす事ができなかったそうです。

芝畑の作業風景

Ⅲ．富士山麓の土地を使った産業

富士山麓は、低山帯では森林地帯も大きく広がっていますが、富士山の噴火や側火山などの火山活動によって標高2,000m以上の土地では火山灰土壌で森林が形成されていません。また、標高1,000m以下の草原や原野が広がっている地域が、富士山西麓地域「朝霧高原」や東麓の「大野原」にみられます。朝霧高原は日本有数の酪農地帯として本州では最大の1,000haの牧草地を有しています。しかし、この朝霧高原も多雨な地域でもともとは富士山の火山灰土が堆積したやせた土壌でした。このような農業に適さない土壌を利用した、牧場経営行われるようになりました。

【文献にみる産業の記録】

明治初期の牧畜業……牛馬については、農耕用がほとんどであった。浜松県では1872(明治6)年現在、馬9,876頭、牛59頭、豚754頭。静岡県では1874年現在、馬7,511頭、牛1,719頭。足柄県では1874年現在、馬9,633頭、牛3,549頭となっている。(「静岡県史通史編５」より)

江原素六の近代的牧畜業……駿河国駿東郡長窪村(長泉町)や東沢田村(沼津市)など愛鷹山のふもとに土着した旧静岡藩士たち(発足当時社員75人)が江原素六をリーダーとして県から貸付金5,000円を元手に洋種の牛や羊の飼育を開始した。明治５(1872)年11月洋牛３頭、翌年３月洋牛３頭を購入。また、社員１人を東京芝愛宕下の牛商前田留吉について搾乳及び製乳技術を学ばせた。(「静岡県史通史編５」より)

「畜産」……明治以降肉食・飲乳が普及するにつれて、昭和30年代には豚・やぎ・めんよう・肉牛・乳牛・馬の飼育数が激増した。

牛は乳牛と役肉牛に分れ、乳牛は大正３(1914)年当時はわずか50頭に足らず、役肉牛も600頭にみたなかったが、飼育が奨励された結果、酪農振興法の制度を必要とするほどまでに普及した。御殿場市神山の県営の種蓄場は、優良品種を輸入して品種の改良につとめていた。「十里木の牧場」・「神山種蓄場」(「東駿地誌」より)

１．牧場

(1) 裾野市における牧場経営

① 「忠ちゃん牧場」杉山忠作氏

裾野市須山、昭和２年生まれ。

杉山さんが須山にて農業を継ぐようになったのは、長男が第２次世界大戦にて戦死され、次男であった杉山さんが「跡取り」として家を継ぐことからだそうです。昭和22年秋のことでした。当時はまだ食料難の時代で、家族総出でにより畑で作物を作り、家族と共に暮らしを守る生活でした。その後、国や県から食料増産体制の一環として、畜産農業が奨励されてきました。杉山さんは御殿場市川島田にあった森永乳業、森永研究所や、御殿場市神山にあった静岡県種畜場の当時の工場長であった毛利場長の指導を受け、昭和26年頃県種蓄場よりメンヨウのオス・メス各１頭を購入し、メンヨウの毛と衣類との交換により、一家の生活を守っていました。さらに昭和28年には、森永研究所からの紹介により雌の子牛１頭を購入し、牛乳をしぼり御殿場市方面へ販売するようになりました。牛に草を与え、乳をしぼり経済的にも家族への負担がへってきました。この親牛がメスの子牛２頭を誕生させました。この頃から杉山さんは「牛で生活をしていこう」と考え、神奈川より雌の子牛５頭を買い求めました。杉山さんは、昭和32年８月30日須山の自宅を離れ、現在の須山字山口の地にて牧場経営を、馬１頭、牛８頭にて始めました。当時、須山地区内でも開拓農協を組織

杉山忠作氏